

神戸大学
教養部

広報



特集：教養部を惜しむ

平成4年(1992)10月15日

教養部広報委員会

No.81

目 次

- 巻頭言— 小野厚夫 (1)
- 教養部オリエンテーション講演要旨— 竹内 実 (2)
- 別れのことば—
- A Farewell Message Brian Tomlinson (5)
- On Teaching Politics and Economics in English Bernard K. Gordon (6)
- 新任教官紹介— (8)
- 教養部のうごき— (10)
- 特集：「教養部を惜しむ」— (12)
- 研修会報告— (29)
- 自治会との交渉記録— (30)
- 自治会関係の話し合いの記録〈第二課程〉— (35)
- 教養部教官写真 (1992年3月撮影)— (37)

小松原千里、宇磨谷教明、蛭名邦禎、曾根ひろみ、
神吉賢一、寛久美子、讃岐田訓、水田恭平、
池田裕司、三上剛史、平川和文、成相裕之、
栢田義一、渡邊 清

表紙題字 長岡 美和子

写真特集「教養部残照」 撮 影 国友 正 和



— 巻頭言 —

大学は変わる

教養部評議員 小野 厚 夫



いま神戸大学では、大幅な大学改革が進行中である。すでに工学部は4月から新しい組織に切り替わったが、この10月には教養部と教育学部が改組され、新しく2つの学部、すなわち国際文化学部と発達科学部が船出をする。ただし、これら新学部で学生が入学するのは来年度からである。

同時に10月から、学内教育研究施設としての大学教育研究センターが発足し、教養部改組後の全学に共通した教育の企画、運営と、教育研究についての評価の業務が行われる。

教養部が改組されても、直ちに教養部という組織が消滅するわけではない。今年入学した学生は教養部制度の最後の学生ということになるので、平成6年3月末日まで教養部を存続させる。したがって、今年入学した学生諸君は、従来通り教養課程を教養部で過ごすことになる。

改革は組織だけではない。一般教育の改革に留まらず、大学教育全体が再編成される。それにしたがって、来年度入学生から、新しい授業科目区分に基づく、新しいカリキュラムが適用されることになり、4年一貫した教育が実施に移される。

こうした大学改革は、現在日本のほとんどの大学で検討が進められており、すでに実施に移しつつある神戸大学は、いま全国の注目を集めている。このまま進めば、戦後に新しい大学制度が発足して以来、大学紛争でもなしえなかった最大規模の教育制度の改革と、カリキュラムの改革ということになる。

この引金となったのは、昨年7月から施行された新しい大学設置基準と、18歳人口の推移である。

前の大学設置基準は、大学を設置するさいに必要な最低基準を定めたもので、この基準を満たしてさえいれば、大学が特に責任を問われるという

ことはなかった。

しかし、今回の設置基準の弾力化、大綱化にもなっており、今度は大学が、大学自身の判断で細目の基準を設定しなければならなくなったわけで、それだけに大学の任務と責任が重くなったといえよう。

来年から大学の受験人口は減少する一方であり、国立大学といえども、大学自身が大学教育の充実と個性化を図らねば、今後生き残れない時代がこようとしている。

さらに、高等学校の学習指導要領が改訂され、平成6年度から新しい要領で実施される。したがって、その3年後には、従来とは異なる、まったく新しい型の学生が大学に入学することになるだろう。

これらの学生に対して、どのようなカリキュラムで対処すべきか、今後の重要な検討課題である。おそらく、神戸大学においても、改革は今回の分に留まることなく、今後とも継続的に続けざるをえないと思われる。

いま大学は、大きく変わろうとしている。

異文化理解について

立命館大学教授 竹内 実

私は、中国文学だとか、中国の政治問題をやっているんですが、国際関係学部に移ったため、いまは文化交流史を担当しています。現在は諸君もご承知のように、どんどん変わっている時代で、国際関係学部の4年間をふりかえってみると、中国で天安門事件が起り、それが東西ドイツに跳ね返ってベルリンの壁がなくなって、東欧諸国が崩れて、それが今度はクレムリンにぶつかって、ソビエト連邦が解体するという、もうこれ以上は変わらないんじゃないかと思うほどの変わりようです。こういう変化は、もう大学ふうには、序論、第一章、第二章というふうに教えるのはたいへん難しい。こういう時代に即応して、もうひとつ知識の体系が生まれています。これは諸君がおそらく受験勉強のときにたぶん開いたと思いますが、いわゆる「現代用語」辞典です。なにか新しい言葉が出てきたときに、この本を開いて、その意味と働きを知る、こういうキーワードの知識体系というものが生まれている。

それで、国際関係学部に入ったときに、そのキーワードは何かと考えたのですが、その第一が「国際化」です。その次が「国際摩擦」、そして「文化摩擦」、続いて「異文化理解」と、大体こういう系列で言葉が出てくるんですね。そこで、この「国

際摩擦」とは何かと考えてみますと、これをこれまでの社会科学ではうまく説明できなくなってきたんです。少し前までなら、「帝国主義」の侵略によって植民地が生まれた、植民地は独立しなければならぬ——というのが国際摩擦だったわけです。現在でも地球上のいろんなところで戦争が起こっている。それは民族の独立をめぐる戦いであるわけですが、すると今度は帝国主義とは何かということが問題となってくる。しかしアフリカ諸国をご覧になったらわかるように、私が諸君ぐらゐよりもう少しうえの世代のときにアフリカ諸国が独立したわけですが、これらの国々はいまだに経済援助を必要としている。ということは、かつての帝国主義から援助を受けなければならない。そこで、帝国主義対植民地という図式が、もう成立しなくなりました。現実には存在しないかということも別の議論ですが、もうそんなことはいっていただけなくなったんです。それで、国際摩擦という言葉が生まれてきたのだらうと私は思っています。そこから、政治とか経済に関係なく、社会的な摩擦が出てくるので、文化摩擦という言葉も出てきたのだらうと思います。要するに、国際化というものと「紛争」、トラブルは切り離せない。それを心得ておいていただけたらと思います。

諸君のご両親たちの世代の方が、実際に海外に出たときには、それも国際化だったんですが、それは「出掛けていく」国際化だったんですね。ところが、いまは、いながらにして、「向こうから来る」国際化なのです。そこで地方自治体が、国際化に取り組んでいる。おとしですが、京都市の職員の方の研修会に呼ばれて、こちらから話を聞いたかったぐらいなんです。国際化について話をするようになりました。留学生とか、日本に入ってきて労働をしている人たちが定着して、そのお子さんが保育所や小学校に入ろうとしているんですね。それで地方自治体としてどうい



う具合に対応したらいいか、それを考えているという。さらに、京都市の消防局からも、話をしてほしいと依頼がありました。要するに地方行政のいちばん先端が、いわば個々の現場でこの問題と取り組んでいるわけです。

私の担当している文化交流史は、教科書がないので、困っているわけですが、結局わたしたちが直面している文化摩擦とか異文化は、生きている生身の自分がぶつかっているものなんです。そこで、ひとりの人間でありながら、二つの文化を自分の身に引き受けた人の自叙伝を選んで、それを教科書にしたわけです。そこで前期は『李香蘭

私の半生』を取り上げました。この人は日本人だったんですが、「李香蘭」という名前前でデビューして、満州国の放送局からレコードをだしていたのです。この国自体、研究すべきことが多くあるのですが、主に日本人によって経営されていた国で、宣伝ということもあり、中国人の国民の気持ちを和らげるために、中国語で歌える人を探していたのです。そこで山口淑子さんという人が、当時まだ10代だったのですが歌も習っていたし中国語もできるということで、本名は隠してデビューしたわけです。やがて映画も撮影するようになりまして、10本以上あるのですが、その中に『支那の夜』というものもありました。この支那という言葉は当時侮蔑的な響きをもっていて、このフィルムは保存されているんですけど、『蘇州の夜』という別のタイトルが付けられて保存されています。

このシナリオを書いたのは日本人の作家なんですけれども、ここでいちばん一生懸命になって書いた場面というのは、日本人の船員と彼女の演じる少女の気持ちが通いあうきっかけを描いているところです。そこで船員が少女を殴る、殴ることで少女の気持ちが開かれて、彼を好きになっていくというものでした。日本列島に住んでいる人の感覚にとっては、殴るということにあまり罪悪感がない。殴るにもいろんなものがあって、その頂点は、愛情をもって殴る、最高の愛情は暴力であるという考え方もある。この映画は、中国各地で上映されて、日本人がいかに中国人と親善関係を結びたがっているか、日本の国策がいかに中国の幸福を願っているかをアピールするためのものでした。ところが、彼女の自叙伝を読むと、この映画は非常な反発を買った。現実に中国人は日本人によって支配されている。そこでいかにハンサム

な日本人によって親切にされても、それは絵空事である。まあ、それは映画だからいいとしても、この日本人が中国人の少女を殴る。強いものが弱いものを、占領民族が被占領民族を殴るというので、まず反発を買った。さらに、にもかかわらずこの女性がこの男性を好きになる、これは自分たちの感情を侮辱するものだ、みな腹を立てて帰っていったというんですね。つまり創った日本のほうは、なんとか仲良くなりたと思って創ったんですが、見せられたほうは、全然逆の反応をしたことになる。で、この山口淑子さんは、この自叙伝のなかで、このような映画を作ったということも隠さず書いていて、そして中国人の反応を知って、非常に恥ずかしい思いをしたと、反省しているんですね。

異文化というのは、土地に根ざしています。もうひとつは、人間に根ざしている。人間に根ざした文化がある。国際関係学部では、国と国、民族と民族の異文化ということで話をしていたわけですが、考えていくと、男性と女性の間でも文化は違う。世代によっても違います。国際化というのはもっぱら横の関係ですが、この関係をどんどん掘って行って、文化摩擦といったものを考えていくと、これは縦の関係にも成り立つことだろうと思うんです。

文化という非常に難しいことのように聞こえます。しかし私は目の前に異文化があると思うんです。神戸には中華街がありますが、箸の置き方が違いますね。なぜ同じ箸を使いながら、一方は横に置き、もう一方は縦に置くのか、これも一つの問題です。さらに、箸に対比されるものにナイフとフォークがあります。これは切ったり突き刺したりするためのものです。しかし箸にはこうい



う働きはない。そこで私は試験の時に「箸についての考察を記せ」と問題を出したのですが、一つだけ本当にいい答案がありました。講義では私は、ナイフやフォークとの違いを話して、疑問を投げ掛けるに止めていたのですが、その学生は、なぜ箸では突き刺したりしないのかという問題を自分に課して、それに答えているんです。日本には、食物を尊ぶという気持ちがあるというんですね。突き刺すに忍びない気持ちが我々にあるという。確かにそうですね。それから、縦に置くか横に置くかということは、おそらくは大きな文明圏の違いにまで発展する問題ではないかという気が私はするんです。たとえば中国から知人がやってきたときに、京都の食事に招待すると、はじめは箸は横に置いてあるんですが、話に熱中するうちに、かならず縦に置き直していますね。と思うと、台湾で食事をしたときに、箸が横に置いてある。日本人用にそうしているのかという、違うという。これはおそらく、日本統治下が長かったため、現地の人たちのうちにも、それが浸透していった結果だと思えます。このように毎日使う箸とか、ナイフとフォークとか、そういうものにも思いを深めて、色々調べていくうちに、文明圏の違いとか、歴史の残していった跡をたどることもできるようです。

読売新聞、1月17日の「編集手帳」という一面下のコラムで、韓国人女性の書いた『スカートのしたの風』という本に、こう書かれてあると紹介されています。日本人が茶わんを手にもち箸を使って食事をしているのを見たとき、この本の著者は、行儀が悪いと思った、嫌悪感すら感じたというんですね。というのは、韓国ではお膳は動かさない、そこでスープやご飯は置いたままスプーンで食べるわけです。もうひとつ、著者は、タクシーを待っていて、先を越されたときの表現が違うといえます。日本では、「乗られちゃった」と、自分に引き付けて、受け身で言う。それに対して、韓国では「あの人が乗っていった」と、相手の動作に引き付けて表現する。これは、我々が非常に受け身の文化を持っているからだろうと思うんです。こういう日常的な場面にも、文化の違いがあらわれます。それから、今年は「倭乱(わらん)400年」だと韓国では言うがこのコラムに出ています。これは、秀吉の朝鮮侵攻のことですね。年というものも、それを使う民族、地域、文化によってさまざまな

意味をもっているのです。

神戸は山と海に挟まれているということで、山の文化と海の文化を兼ね備えている。そして港町ですから、海外の文化が直撃してくると思うんです。こういう場所で勉強される4年間というのは、たいへん刺激に満ちたものになるだろうと思います。実はこの前、国際関係学部の謝恩会の席で、ある詩を朗読したんですが、これはこれから勉強されていく皆さんに贈るものとしても、いいものだと思います。屈原という人の、2200年前からのメッセージだと思って、聞いてください。

雨が下の、うまし木よ
橋、ここに移り来て、なじみたり
天の定め受けて、よその国に移らず、
わが南の国に、育ちたり
深く堅く根を張りたれば、よそに移すこと難し
まして志を一つにす、緑なる葉、白き花茂れるさま、さても愛すべし
重なれる枝、鋭き刺、まろき実のまろやかさよ、
青き色、黄なる色、入り交じり色とりどりの鮮やかさよ
艶やかなる色、内に包める白さ、人の世の理、担うがごとし
漂う香り、ほどよき形、美しけれど、飾りたてず
ああ、汝の幼き志は既にして際立つところありき
一人立ちて、よその国に移らず、などか嘉みすべからざらんや
深く堅く根を張りたれば、よそに移すこと難し
心広く、さても求むることなし
汚れたる世間に目覚め、一人立ち
思うままに振舞えど、放埒ならず
心を静め、自らつつしみ、終わるまで過ち侵さず
徳を守り、私心なく、天地の動きに交わる
願わくば、齢ともに衰え
これと久しく友たらん
淑やかに誇り高く、淫らならず
堅く、さても木目あり
年の頃若しといえど、目の上の師とすべし
行ない、伯夷に準えらる、飢えてもって手本となさん

どうか、元気で4年間の大学生活を送ってください。

—別れのことば—

A FAREWELL MESSAGE

Brian Tomlinson



In October I will be leaving Kobe University to take up the post of EFL Writer in Residence at the University of Essex in England.

I will be leaving Kobe with many happy memories and with a very positive feeling about my three years here. For this I must in part thank my colleagues in the University and especially the members of the English Department in the College of Liberal Arts. They have been very friendly, helpful and supportive. I would like to wish them success with their new department and good fortune in their personal lives and careers. My message to them is to carry on being cheerful, interesting people and my appeal is for them to use more English in the classroom. My experience is that the students can understand English and that they acquire more language and confidence from exposure to English in use in the classroom.

I would like especially to thank the students I have taught in my three years here. With very few exceptions they have been very positive, participatory and creative. And they have been great fun. I have really enjoyed their sense of humour and their ability to work hard and to relax at the same time. When I first came to Japan I was told that Japanese students were lazy and dull and had no ability to use English at all. I quickly found out that this is not true. On the contrary most of the students in my classes have worked hard, have responded in a very intelligent, witty and imaginative way and have used English very effectively to express their thoughts and feelings.

My message to the students is for them to carry on being broad-minded, humanistic and positive. For them to keep their sense of humour and their sense of perspective and in particular to keep their ability to be interesting individuals working towards a common cause. My appeal is for them to maintain their interest and especially their confidence in English, for them to continue to use English to promote international communication and understanding and for them to fulfill their potential as very effective communicators in English. I know they can do it. I have worked in six different countries and the most creative work I have received in English has been from students in Japan.

Goodbye to everyone and good luck.

15/7/92

ON TEACHING POLITICS AND ECONOMICS IN ENGLISH

by

Bernard k. Gordon

Visiting Professor

English Department, Kobe University
PROFESSOR OF POLITICAL SCIENCE
THE UNIVERSITY OF NEW HAMPSHIRE

Since my first visit to Japan on a research trip thirty years ago—in 1962—I have said more 'Sayonaras' to friends than I care to remember. I could not have imagined on that first visit that in the summer of 1992, I would be leaving Japan again—this time after a year of teaching in the English Department at Kobe University. In the years between, I have made many more visits to Japan, including a year when my family and I lived in Kyoto. But as I wrote in Koho last year, I have a special tie here for two reasons: first because the University of New Hampshire has a valuable faculty exchange arrangement with your English Department; second because my daughter was a student here five years ago and now lives in Tokyo.



Even so, this has been a unique year. For the first time in 30 years of visiting Japan I have had daily conversations, in English, with hundreds of Kobe Daigaku students. I have learned greatly from them, and believe I have also contributed to their learning—not only in English—but to their knowledge about Japanese politics, economics, and society. How has this been possible? Because some of the most important articles published in Chuo Koron and Bungei Shunju, for example, are regularly published IN ENGLISH in a beautiful magazine called "Japan Echo." Thus my students have read all or parts of those articles, and our discussions have included keiretsu, keizai, karoshi, kanemaru, and many subjects that do not begin with a "K."

None of this would have been possible without the incredible cooperation of Faculty and Staff Members in the College of Liberal Arts, and I want to thank my friends in the English Department; the Library staff; and the Administration Office. There is an American custom that says that when we complete some important work we should not thank by individual name those people who have helped us. The reason is not that we are ungrateful, but we worry that by mentioning some names, we will neglect others, and therefore bring hurt to those not named individually.

What shall I do about this American custom? If I do not mention Professor Yoshio Tsuda, who has exerted himself beyond reasonable devotion to duty, I will be guilty of gross ingratitude. The same is true if I do not mention several others, in the American way, with their myoji following the first name. I especially thank Ms. Yukiko Yamamoto, who I call tejinashi because there is nothing she cannot do! Also, Ms. Mika Kishimoto and Ms. Miho Sao, have taken their time to make my life easier, and Mr. Ouchi and Ms. Maeda have always helped. And of course all my faculty friends, including Professors Ohno, Furomoto, Niuro, Kato, Ueda, Ono, Yamazawa, and for their patience my Nihon-go teachers Sadanobu and Mizuno! But now the list is already long, and you see how dangerous is this American custom, so I thank you all, and now will say a few words about why we are here: to teach Kobe University students.

First, we cannot be under illusions. We all know that many students believe they have worked so hard to pass the entrance exams that once they get here, they are entitled to "take it easy." Of course in my first days here I encountered several who actually thought they could sleep in my classes! It was not difficult to change that, and after the first week such incredible behavior was never repeated. But let's also concentrate on another reality: just as there are many students who want little but asobi while here, there are also many who are inquisitive and can quickly become enthusiastic about what we can teach. Moreover, so many are very bright, otherwise they would not be here. Perhaps most important is that our students represent the future of the nation. Therefore we cannot allow them to waste time, even if that is what they think they want to do. How can we avoid that?

In two ways, in my humble opinion. The first is to assure that we choose subjects and methods of teaching that are interesting to students—not just to ourselves. The second way is to give them plenty to do, and then demand they do it! At least two-thirds of our students here will "rise to the challenge." They may complain but they will also take pride once they have learned new skills. That is what I have learned at Kobe University, and I want to thank you all again for having helped me to learn that lesson.

16 July 1992

—新任教官紹介—

就任のご挨拶をかねて

横尾 能 範 (情報科学担当)

出身校に就職することになって、全く頭が上がらない思いをされた方が少なからずおられると思います。初めて助手になった時の私もそうでした。



それから20数年後、意を決してそこを退き、「情報科学」の一員として教養部にやって来ました。ここも出身大学ですから同様なことは覚悟していました。ところが、そっと頭をもたげて見渡せど、恩師はもう見あたらぬ。ホッとする思いより淋しさが先でした。逆に教え子や師を同じくする後輩が居る始末で、時の流れをひしひしと感じています。

今までは、教育学部で学校保健のための情報処理や、騒音の学習への影響、マウスの学習実験などをコンピュータを使ってやってきました。その間、教育分野や公衆衛生のためのコンピュータ研修を頼まれ、海外で過ごしたことも計2年近くになります。派遣先は特定な国ではなく国際機関がほとんどでした。教える側も教わる側も多国籍の集団で、文化や考え方の違いにはよく出くわしました。

開発途上でもやや進んだタイやマレーシアに集まった研修でしたが、研修が済めば各々は自分の持ち場に帰ります。ですから短期間の内に世界中に知合いができ、今でもいろんな国の人々と家族ぐるみの交流が続いています。国際化、情報化が大きく取り上げられる以前に、このような経験が出来たことに感謝しています。

教養部の一員となって、はや3ヵ月が経ちまし

た。教養部スタッフとしての仕事は、先輩の努力によって既に出来上がった機構の中で回転し、何とかこなせています。しかし、研究室が北の最上階ということ、同じ大学という安心感が災いして、先生方のお名前がなかなか覚えられません。そうこうしている間に、形式的とはいえお別れの方も多くおられ、焦りを感じています。

教養部は、それこそ多国籍世界ですから、この機会に多くの方々と知合い、互いに多くを学びたいと思っています。10月が来て、それぞれに所属が別れ、行き先が異なっても同じ船の上、時には船上パーティーを開き、大いに交流したいものです。

どうぞよろしくお願いします。

小 紫 重 徳 (英語担当)

兵庫県の郡部、播州平野のほとんど北東の果てに生まれ育ちましたが、高校卒業と同時に北国に憧れて仙台に遊学しました。親はもちろん、親戚・知人のいない田舎町で放埒な学生生活を謳歌したまではよかったです。いざ就職という段になっ



て、始めて郷里の近辺に職を得ることは至難の業であることに思い至りました。



そして、幸い縁あって水戸で口に糊しつつ春の名残を惜しんでいるうちに、いつしか20年の歳月が過ぎ去りました。

仙台の思い出といえば、スペンサーという詩人との出会いを語らないわけにはいきません。それは東北大学の4年生の時の「英文学特殊講義」の時間で、担当されたのは村岡教授でした。ちなみに、ずっと後になって、先生は、学生として在籍中の東北帝国大学に時間講師として出講されていた旧制二高教授の、というより「荒城の月」で知られる、土居晩翠先生がこの16世紀の詩人の「妖精の女王」を講じられた様子を回想されています。ともあれ、私のこの長編寓意詩の世界に分け入った時の衝撃は今でも彷彿とします。とにかく、中世英語の痕跡がそこそこに見られる擬古体(当時としても)の文章に面食らったこともさることながら、それまでわずかばかりの読書経験からくる、詩というものは感性に訴えるものだ、という考えを根底から覆されたのです。その舞台上で活躍するのは、「信仰」、「節度」、「愛」、「友愛」、「正義」、「礼節」そして「無常」といった者たちで、いってみれば、様々な概念が文学的意匠のもとに一つの理念的世界を構築するといった、とりわけ日本文学にはまず例をみない文学様式に遭遇したのです。爾來、それが自己の世界と異質であるがゆえに、わからないがゆえにますますその世界に引き込まれ続けているわけです。そしてそれこそが私のロマンティズムなのかもしれません。

かくして水戸では、というところから私の本当の人生を語らねばならないのかもしれませんが、



紙数が尽きました。あえて付言するとすれば、水戸時代に、かの懐かしい同僚たちが主体的に研究するということを範をもって教えてくれたということでしょうか。つい先日、3か月ぶりにその地を踏んで不意に胸のつまるのを憶えました。

海に見える部屋

水 野 マリ子 (日本語・日本事情担当)

生れて初めて「研究室」というものを使わせていただく身分になった。



これまで20年余り、技術研修生を相手に日本語教育をしてきて、個人で使える部屋など望むべくもなかった身

にとって、個室が、それも「ちょっと古いけど、海に見える明るい大きな部屋やで。」(N教授談)が使えると知って、思わず感激に胸が震えた。

私が生まれたのは、横浜市の南の外れにある、金沢区というところで、東京湾に面した海水浴場が、家から子供の足で歩いて15分程のところであった。夏の遊び場といえば、家の前のたんぼであり、通称「ぼうず山」であり、そしてこの海水浴場であった。

地元の子供は海の家など使わない。家ですでに水着に着替えているから、じりじり照り付ける陽に、むき出しの肩を汗でてらてらさせながら海岸

近くまで来ると、歩道がとぎれ砂浜が始まる。小高い砂の丘を一つ越えないと、海は見えない。海を予感させる空だけが砂の上にある。何となく明るくて広がった空、海のおい。熱い砂を踏みしめ丘を越えると、あとは波打ち際まで一目散。

というわけで、今でも海は好きである。そして、A415の研究室から見える海は、見える海…、見えない…、夏休みになったら、窓ガラスをみがこう。

人 事 異 動

教 官

H. 4. 4. 1	日本語・日本事情	助教授	水 野 マリ子	採用	
"	英 語	教 授	小 紫 重 徳	転任	茨城大学より
"	情報科学	"	横 尾 能 範	"	教育学部より
"	統 計 学	"	内 田 幸 夫	昇任	
"	独 語	"	水 田 恭 平	"	
"	英 語	助教授	西 村 秀 夫	"	
"	数 学	"	河 野 正 晴	"	
"	生 物	講 師	湯 本 貴 和	"	

事務系 退職者

文部技官	濱 田 や ゑ	(生物学教室)
事務補佐員	大 森 千 尋	(用度掛)
技術補佐員	渡 邊 貴久子	(生物学教室)

転出者

事務長補佐	吉 川 圭 三	(医療技術短期大学部事務長へ)
用度主任	塚 崎 英 二	(医学部医事課収入掛債権管理主任へ)
第二課程主任	廣 岡 克 巳	(教育学部学生掛入試主任へ)
学生掛員	林 靖 博	(工学部教務学生掛員へ)



転入者

事務長補佐	小 谷 寿 之	(医学部学務課専門職員より)
用度掛契約主任	井 上 晴 夫	(医学部管理課用度第二掛契約主任より)
学生掛員	北 村 浩 司	(大阪大学庶務部国際交流課留学生掛員より)
学生掛員	川 端 通 夫	(明石高専庶務課庶務係員より)
第二課程掛員	岡 部 均	(医学部医事課入院掛員より)
技術補佐員 (生物学研究室)	向 佐 智子	(新規採用) [42H]

配置換

事務補佐員(用度掛)	佐 尾 美 保	(文科共同研究室より) [42H]
事務補佐員(図学研究室)	岸 本 み か	(文科共同研究室より) [42H]

附属図書館関係

整理掛は情報管理課情報管理第三掛
保管運用掛は情報サービス課情報サービス第三掛となった。

事務系

転出者

整理掛員	小 倉 生 栄	(附属図書館情報管理課雑誌掛雑誌主任へ)
事務補佐員(整理掛)	樽 本 夕 美	(附属図書館情報サービス課情報サービス第六掛へ)(教育学部分館)

転入者

情報管理課管理掛員 事務補佐員 (情報管理第三掛)	吉 見 和 男	(医学部管理課用度第一掛員より)
	中 本 美 加子	(新規採用) [31.5H] (平成4年4月13日付け)

さらば、教養部

小松原 千里（独語）

静かに思へば、万に、過ぎしかたの
恋しさのみぞせんかたなき。（徒然草）

私が神戸大学に赴任してきたのは、昭和39年4月である。ちょうど神戸大学に教養部なるものが出来たその年であった。以後28年、飽きもせず宮々とドイツ語の授業を引受けてきた。あと4年あまりで定年ということになる。その時には国際文化学部なるものの第一期生が卒業し、教養部学生の残留組の学生もすっかりいなくなるであろう。ということは、神戸大学教官としての私は教養部誕生とともに生まれ、教養部の死とともに終わることである。

私はもはや評判芳しからぬ「教養」の中にどっぷりと漬かり、その「教養」を愛してきた。さまざまな「教養書」のおかげを被り、専門書なるものも「教養書」として読んできた。「学者」という大仰な肩書よりも、教養部ドイツ語教師という名を好んだ。だから私は幸いにも、なんとか教養を身につけたとは言えても、学問なるものに従事してきたとは思わない。ドイツ語初等文法を教えることにあけて、よくまあ同じことを飽きることもなく30年も、と思わぬではないが、むろんドイツ語そのものにそれだけの深さと文化があったからである。そしてそういう一見退屈な営みをくり返すにたるものがこの言葉の中にあり、そして役立つ役立つとたないとかの問題以前に、そういうものに心を開き、それを学び、それを伝えること自体に教養というものがあることを知ったからである。

語学教授法がどうのという議論が近頃かましましいが、教養部では語学は教授法とは別のところにあった。それぞれ自分の思いを込めて学生の前に

立つ、それがすべてであった。

神戸大学教養部は、さいわいにもあらゆる生き方に寛容であった。まさにその名のとおり教養部であったからであり「寛容」ということが人間の教養の根底をなすことであったからである。したがってかつて教養部の先生方はみんなそういう教養を身につけておられた。だからすでに去ってゆかれた先生方の顔は、親しかった人も、それほどではなかった人もすべてなつかしい。なつかしさ、人のこころをやさしくし、柔和にしてくれるこの思い、教養部はそういう思いを育んでくれた。教養部なきあと、遠からず「教養部」という名それ自体がそういう思いを呼び起こしてくれることになるであろう。

多くのことがあった。学生デモ、組合運動、そして大学紛争等、だがすべて教養部であればこそあり得たことだ。教養部という、精神を遊ばせるにたるこの、いわば人生の日曜日があったればこそ――。

ともあれ、声が聞こえる。休暇は終わった、いまこそ国際社会のために役立つ時だ、遊びはお仕舞い――と。ではさらば、教養部、たまゆらの虹、わが魂の宿よ。



大学紛争と教養部解散

宇磨谷 教 明（数学）

1959年、神戸大学理学部に助手として着任。1962年に姫路分校勤務を命じられたのが教養部発足の2年前であった。

それ以来、30年以上教養部に在籍してきたことになる。その間の出来事で強く印象に残っているのは、1968～1969年度に起こった大学紛争であり、定年（1997年3月）後に最も強く印象に残っている出来事と尋ねられたら、現在進行中の教養部解散をあげると思う。

大学紛争の初期、「当面している学生問題」についての会議が多く開かれ、それまではあまり付き合いのなかった文化系の先生方とも一緒にお酒を飲む機会ができた。それで教養部在籍の全ての先生方のお顔とお名前が一致するようになった（最近では、私の老化も原因とは思いますが、教授会でお名前を存じ上げない先生方が多くなった）。

大学紛争は二度と経験したくないが、専門が異なる先生方（とくに文化系の）とお酒を通じてお付き合いが出来たことは、私にとって非常に良い経験であった。

すでにお亡くなりになった小島輝正先生もそのお一人である。スケールの大きい人物というのが印象に残っている。

教養部改革案の討議は、大学紛争のころから始められたが、教養部が改革案作りに具体的に

取り組みだしたのは、10年余前からである。

教養部長を2期勤めた小島先生も、部長時代に学部と教養部の格差を実感されたのか、「学部と教養部の格差を無くすためには、教養部を改革しなければならない」とよくお話をしておられた。

初期の頃、教授会に「教養部の全員が参加する新学部を作る案」と「教養部は解散し、教官は既設の学部に分属する案」との二つの案が提案され、「新学部案」が大勢を占めた。この度の改革が、はからずも両者の折衷案の形になったのは興味深い。

神戸大学の今回の改革は前例が無いのと、未だ決っていないことが多いのと、これからどうなるのかと不安に感ずる点もある。

私は今回工学部に分属することになった。定年まで後5年足らず、何処の学部に属しても大学での生活が大きく変化することも無いと思っている。

しかし、若い先生方の持っておられる不安感私のより相当大きいものであろうと思う。今回の改革を契機に、若い先生方の活躍の場が広がることを期待したい。



あるフランス語の詩

蛭名邦禎（物理学）

もう4年ぐらい前になるだろうか、教養部に赴任して1年ほどたった夏のある暑い日、私はエアコン取り付け工事などでやかましい教養部学舎を逃れて、気分転換のため真っ昼間にオンボロのスカイラインに乗って国道2号線を走っていた。空腹を感じたので、たまたま目についたファミリーレストランに入ろうと車を路地に入ると、その裏手に変わった造りの建物があることに気づいた。

その建物が興味をひいたので、私は急に考えを変えて、ファミリーレストランはやめ裏手の建物の方に入った。地下の駐車場に車を入れて一階に上がって行くと、その中央は広場になっていて、そのまわりに子供用品の店が何軒かと小さなレストランが1軒あった。

レストランにはあまり大きくないカウンターのほかにはテーブルが4つほどあった。私はテーブルの席について注文をおえ、出された水を一口飲んでふとテーブルの上に目をやると、紙製のテーブルクロスにフランス語で詩のようなものが印刷してあった。

フランス語は、大学院の入試のためにラジオ講座を半年勉強しただけなので（これは、教養の

ときにやったドイツ語を再び勉強する気にならなかつたためだが）、単語もほとんど忘れており、すぐには意味がとれなかつた。それでも、しばらく眺めていると、その字づらからリズムを感じることができた。

ふと、そのテーブルクロスを裏返すと、表の詩の日本語訳らしきものを書いてあり、「シェフとは…」という表題が付いていた。なるほど、原文にも chef という単語が頻出していたが、各行は、すべて「シェフとは…ではなく、…である」という形に訳されていた。

注文したシーフードピラフが出てくるまでの間、訳文を何度も読み返してみたが、どうみても翻訳としてあまりこなれていない。そう思ってフランス語と日本語を交互に眺めていると、やがて、この「シェフ」というのは誤訳で、正しくは「教授」ではないかという考えが浮かんだ。



私はあとで辞書をひいて調べてみようと思い、食事が終わって店を出るときにそのテーブルクロスをたたんで胸ポケットに入れた。

その日、夜遅く家に帰ってから、私は久しぶりにフランス語の辞書を引き、その詩の解説にふけた。chef という単語を調べてみると、私の予想に反してそれには「教授」という訳語はなかつた。あれこれ考えているうちに、突然、この詩の原文には professeur とあったのではなからうか、という考えがひらめいた。あのレストランがテーブルクロスに使うためにパロディーにしたのに違いない。そう思って読むと、すべてが氷解した。

私は、その晩、大学院の入試のとき以来の仏文和訳に励み、爽快な汗を流した。自分が教養の学生だったときには、訳読がこんなに楽しいものとは考えてもみなかつた。広報で「教養部を惜しむ」という特集をやると聞いたとき私はその晩のことを思い出した。

あとで記憶が間違っていなかったかと気になって、あときのテーブルクロスを探してみた。確か、力作の訳文も一緒にとってあるはずだ。あちこち探したが、どうしても見つけ出すことができなかった。ふと、その訳文のファイルがコンピュータの中に残っているのではないかと思い、ファイnderで検索してまわった。いくつか試したあと、「ざれごと」というキーワードを入力してみると、古い方のハードディスクの中に近頃開けたことのないフォルダーが見つかった。その中にあった文書を開いてみると、以下の訳文が出てきた。これが本当にあのかどうか記憶がはっきりしない。ひょっとすると、あの翌年に蔓延したコンピュータウイルスによってダメージを受けているかも知れない。とにかく、その訳文を紹介して教養部へのお別れの言葉に代えよう。

(14 juil. 1992)

☆☆☆☆☆

教授には理由がある

作者不詳

1. 教授には、いつでもちゃんと理由がある。一見でたらしめに見えようと、凡人にはわからぬ理由がある。
2. たとえ、助教授以下の教官や、職員、あるいは学生が、教授に不満をおぼえても、上の第1条を忘れるな。
3. 教授は眠ってるわけじゃない。深く思索に沈むだけ。
4. 教授は酒盛りしてはいない。シンポジウムの最中さ。
5. 教授は飲んでるわけじゃない。成分分析してるだけ。
6. 教授は手抜きをしていない。ゆかしく自制してるだけ。
7. 教授は研究忘れてない。だけど重要用件で、研究室にはもどれない。
8. 教授は講義をさぼってない。学生達が自主的に、勉強するのを待っている。
9. 教授は秘書とのおしゃべりに、時間をつぶしてるわけじゃない。仕事のやり方・作法など、懇切指導してるだけ。
10. 教授は新聞・週刊誌、無為に読んでるわけじゃない。情報収集あればこそ研究・教育うまくいく。
11. 教授はゲームやお遊びに、うつつ抜かしてるわけじゃない。コンピュータの性能を、毎日調査してるだけ。
12. カラオケバーでの姿見て、教授を俗物と思うは早計だ。ひとたび教室に入ったら、どこから見ても聖職者。
13. すっ裸になろうとも、教授は教授であることを、一瞬たりとも忘れない。
14. たとえムチャクチャ言われても、恨むな。教授も楽じゃない。歴史の中での役割と、将来の展望見通して、常々欠かさず皆のこと、世界のこと配慮する。

教養部の思い出

曾根 ひろみ（歴史学）

1) 同僚ということば

神戸大学の教養部は、私が初めて社会人としてのスタートをきった場所である。

赴任してはじめての年賀状の中で、現在はすでに退官なさっている桂圭男先生が「これから同僚としてともにがんばりましょう!」と書いてくださった。桂先生はげげなく書かれたにすぎないのかもしれない。けれど、この「同僚」という言葉は、当時の私にとって大変新鮮な響きをもっていた。この言葉には、友人、仲間と呼ぶほど私的空間を共有しているわけではないが、「先輩・後輩」、「上司・部下」と呼ぶよりはずっと開かれた、フラットな人と人とのつながりを示すニュアンスがある。桂先生は、年令的にも研究実績の上でも、私が院生ならば指導教官にもあたる方である。その先生から「同僚」と呼ばれたことが、私の背筋を伸ばさせ、すこしおおげさに言えば「ひとに甘えない独立した社会人」たる気概を自覚させてくれたような気がする。

しかし私は、「同僚」という言葉にこめられたフラットなニュアンスが、実は教養部全体を包む空気であることを、まもなく知ることになった。それは、赴任して一年ほど経ち、第一文共へ足を踏み入れるようになってからのことである。

まず何人もの方から「先生と呼ばないで『さん』づけで呼んでほしい」と言われた。——私は学生にとっては先生だけど、あなたの先生ではないもの。最初にそう言ったのは、ドイツ語の光末さんである。長い学生・院生の生活の中で、大学の先生を一緒に「先生」と呼ぶことに慣れてきた私は、当初とまどった。しかし、今になって思うと、そう呼び合うことが、実際の人間関係をより対等なものに変えてきた一面があったように思われる。もちろん実際の私は、年上の方を「先生」と呼び、

相談にのってもらったり頼ったりしていることの方がむしろ多い。けれど、「職場を共有する対等な同僚としてがんばろう」と背伸びすることで、教養部での仕事や生活に前向きにぶつかっていったことは確かだと思う。

2) 第一文共について

第一文共は、こうした教養部の雰囲気象徴する、不思議な空間である。赴任してまだ日が浅くなんとなく寂しい夕方、第一文共へ行くと、誰かが話しかけ夕食に誘ってくれた。Ⅱ課程の講義が終わりここへ戻ると、時にワインや冷えたビールが「さあ、どうぞ」とタイミングよく出されたりする。昼食後、お茶やコーヒーを飲みながら交わされた何万何千もの言葉。今は、新学部の問題がもつばら話題の焦点だが、それまでは、お互いの研究交流はもちろんのこと、結婚・出産・転居というようなプライベートな近況報告、学生への愚痴から、映画・演劇・プロ野球といった娯楽情報に至るまで話題は多岐にわたった。私は気がねなく自由に話すことの楽しさを味わい、話すことでしか理解できなかったであろうさまざまな個性に出会った。

教養部で社会人としてのスタートをきることができたことに感謝の気持ちをこめて、さようならを言います。



教養部への惜別

神吉 賢一（保健体育）

保健体育が大学で必須になったのは、昭和24年発足の新制大学からである。聞くところによると、その当時は、物資不足で運動用器具はほとんど無く、運動場はその一部が野菜畑やイモ畑になっていて随分指導には苦勞をされたらしい。

御影分校と姫路分校に二分されていた教養課程が昭和38年4月に御影が、そして39年10月には姫路が統合され教養部が発足した頃も事情は昔と多に異なるが、施設の面でかなりの苦勞があったが今となっては懐かしい思い出といえます。小生



が助手として赴任したのは丁度この頃である。

体育実技の施設は体育館（現第二体育館）が39年10月に完成するまで屋外のバレーボールコート3面がC棟北（現駐車場）にあった。また、グラウンドは南北に川が流れ、今の武道館のところには20メートルはあったとおられる格好のよい瓦礫の独立峰が存在していた。この年の前期の授業は殆ど六甲台のグラウンドで行なわれ、その後数年は続いた。授業を受ける学生たちはあちこちの木陰で更衣をしていた。狭苦しい今の更衣室よりはるかに衛生的牧歌的であった。雨の日は教室で実技が行なわれ、K先生やY先生の机や椅子を利用した

トレーニングを感心して見ていたものです。その後、42年にはグラウンドが完成し、続いて体育館（現第1体育館）が竣工した。そして46年には農学部の移管とともに武道館ができ、6面のテニスコートができたのは49年3月であった。このように運動施設は教養部発足以来30年、次々と整備されてきた。あとは温水プールを備えた総合体育館、総合トレーニング場ができれば正課体育実技だけでなく運動部関係の練習条件も飛躍的に良くなるなどと考えていた矢先の教養部の発展的解体である。

思えば教養部の歴史は施設整備の道程であったといえそうです。教養部が解体となっても発足当時のことを思いながら施設だけでなく健康・スポーツ科学の充実に努力したいと思う。

施設以外に思い出すのは保健体育教室が実施していた「夏山登山」や「スキー教室」である。「スキー教室」は単位化され、今も実施されているが、「夏山登山」は参加希望者がなく実行できなくなって久しい。スキー

はいまだ人気スポーツであるのに比べ、登山の低落は考えもなかったことである。教養部の夏山登山は学生だけでなく他教科の先生方も参加され教養部行事として昭和25年から始められたもので、剣、立山をはじめ白馬、槍、穂高など北アルプスを中心にいろいろのコースで実施していた。近頃、山岳遭難を見聞きするたびに、50名にもなる大パーティで、30数年間安全に行事を遂行できたことは、協力していただいた山岳部員や同行頂いた事務官の方々の協力の賜物と感謝しています。新たなページに新たな歴史が積み重ねられることを期待して……。

神戸大学教養部の先進性のひとつ

—女性教員の比率に思うことなど—

寛 久美子（中国語）

神戸大学教養部が改組して国際文化学部になるという歴史の変革の時期にわたしも立ち会うことになった。この機会にわが教養部教授会の、他大学や他部局に抜きん出た先進性について、わたしは女性研究者の立場から一つのことを記録しておきたいと思う。

まず私事から始めることをお許しいただきたい。わたしが長い就職浪人の生活にピリオドを打って神戸大学教養部に就職できたのは、日本中での中国語学習熱がにわか高まった“周恩来のピンポンとパレー・ボール外交”の余波、及び“日中国交回復”の機運による。そのころから中国語担当教師のポストが全国的に増えはじめ、教師の人材不足が起こったのである。その連鎖反応のおかげで、わたしにも就職のチャンスが訪れてきたと言えるのだ。しかし、採用を決定するのはあくまで大学の教授会である。わたし自身にはなんらの決定権もないのだから、いくつもの僥倖がなければ実現するものではなかったはずである。僥倖のなかでもとくに、先任者としてドイツ語とロシア語学科に一人ずつ、すでに立派な女性教員が在職中であったことは、わたしの採用に当たっても大きな側面援助の効果をもったと思われる。「はじめから道があるのではない。人が歩きはじめ、踏み固めるうちに、しだいに道になるのだ」という魯迅のことが示すように、細いながらも道がすでに開かれていたことは、有り難い幸運であった。

当時の国立大学では、ドクター・コースを修了した女性研究者でも、無職または教務補佐員・万年助手などに据え置かれたままで当たり前とされ

ていた。女性の教授や助教授などの教員がいるところはほとんどなく、“女性は大学の教師には採用しない”というのが普通の時代だったのである。当時非常勤講師だったわたしの周辺では、学歴も業績も十分な資格に達しているオーバー・ドクター生が研究職採用公募に応募しても、“女性”という理由だけで審査以前に除外されるという体験ばかり報告されるのが常だった。教育研究者として養成されたのに専門の職務に就く機会をはじめから閉ざされているということは、その人の研究を生かし、さらに発展させる機会を奪うということと同じである。だから、わたしと似たような立場で苦しんでいた多くの女性研究者にとっては、たった一人の就職実現でも大きな励ましを与えるニュースとなったのである。女性教員採用を忌避しなかった神戸大学教養部教授会の先見的な公正さは、研究をつづけようとする女性たちにとって希望を与える灯台的な意味合いをもったといっても過言ではなく、その意味でも、採用されたことにわたしは深く感謝している。

今でも日本を全体的に見れば、女性の就職に差別がつきまとう構図は基本的には変わっていない。その中で神戸大学教養部は、例外的に女性教員数比率を伸ばしつづけた、まれな存在だと言われている。やはり、わたしたちはこれを宣伝しないわけにはいかないのだ。ユニークなCMウオッチング評論で知られる天野祐吉が、うまいたとえ方をしていた。「日本社会には男女に対する“性差別素”という空気ははびこっていて、人々は知らず知らずのうちにそれに不感症になっているだけ」といっ

たような内容だったと思うが、わたしはそのとらえかたの適切さにひどく感心したものだ。女性を社会的な場から排除してしまう“通念”は根強いようだが、それは“男性優位を固持したがる男の悪意”とか、“数千年の歴史的検証に堪えうるような確たる理論的根拠”があつてのことではなく、言ってみればいつの間にか人々の意識に刷り込まれた“性差別素”のせいだというのである。わが教養部でもこの差別素をはじめ打ち破る時にはおそらく少なからぬ抵抗があつたにちがいない。だが、大学教育にとって女性教員の存在が特別不都合なわけではないという常識が成熟すれば、この差別素は消えていくだろうし、わが教養部でもいくらかは消してこられたらと思う。教育研究能力の公平で公正な審査を経ることを基本的な前提条件にした上のだが、わたしとしては、大学の各部局に女性研究者がまだまだ増えてしかるべきだと思っている。その点でも、国際文化学部はよりすぐれた前例を開いてほしい。

しかし、大学にポストがあるというだけでは、誰であってもまともな研究者だとは決して言えないことも、やはり付け加えておかなければならない。神戸大学に就職して20年間、教養部の語学教師として勤務してしながら、わたしは研究者として果たしてこれでいいのかという不安に駆られることしばしばであった。教養過程を通過していく学生たちに、毎日のように語学トレーニング教育

を行うことは、一種の反復的肉体労働に近く、それだけで一週間は一週間として過ぎていく。それで誰も文句は言わないのだが、心身共に余力がないのでそればかりで疲労してしまうのである。かくて、本来の専門分野における研究者としてはこの先一体どういうことになるのだろうかという不安が消えないのであった。そういう不安とは無縁で研究成果を積んでいける有能な人も少なくはないが、わたしにはとても両立できそうになかった。研究成果は本当に微々たるもので、時間は代替がきかない一回きりだから——これをチャンス・コストというのだそう——それが取り戻せないのは、とても辛くさびしいことである。

自分自身の経験から言えることを、もうひとつ。教養部の教師は学生たちにとってはどこまでも“教養で習った先生”の一人に過ぎない。だからどんなにすぐれた先生であっても、“専門的研究の学習指導を行う指導教官”でない教養部の教師の場合は、学部卒業学生からは“わたしの恩師”として位置づけられることなどほとんどない。これはつまり職能的な立場として、若い世代とのあいだに研究面での切磋琢磨の機会を奪われている研究者ということを意味する。古い言いかただが、このように“弟子を持たない”“弟子を育てられない”というのは、研究者としてはきわめて不幸なことと言うべきであろう。

わが教養部に就職できたこと、学内外の多様な

研究仲間に恵まれたこと、それは有り難いことだったけれども、それでも“自分の学生”から厳しく学ぶ機会を持たなかったことを、わたしはひとりの教育研究者として非常に残念に思っている。

新しい国際文化学部が、そうした不幸と無縁であること、そして、全構成員がそれぞれにすぐれた研究的成果を挙げられることを期待すること切である。



『いま思うこと』

讃岐田 訓 (生物学)

ぼくが御影分校にあった教養部に入ったのは1960年である。そして、それまでは入学式のその日にラケットとポロシャツ、トレパンを携えて六甲台のテニスコートへ入部しにゆくほどのテニス馬鹿で、政治のせの字も考えたことなかった少年が、やにわに60年安保闘争の渦中にいた。

ある日、午後の練習前のミーティングで、ひとりの上級生からつぎのような意見が出された。『いまの国会で日米安保条約が強行採決されようとして。日本はどここの国とも軍事同盟を結んだらあかん。学生として、反対せなあかんのや。関西六大学や関西リーグは目前や。負けられへん。練習せなあかん。そやけど今日3時からの三宮センター街の市民・学生デモには参加せなあかんのと違うやろか』。コート上の円陣のなかで議論は白熱した。はじめは、むずかしくて話についていけなかったぼくも、次第に熱くなっていた。結論として、練習を中止し、安保粉砕のプラカードを泥縄的にいっぱいつくって、三宮に向かった。ぼくはその時、わが軟式庭球部に深い誇りを感じていた。

その後、生物学を専攻したぼくは京大理学部の大学院に進んだが、そのときは日韓闘争の真っただ中であつた。そして、ふたたびこの教養部に助手として戻ってきた1968年は、あの悪名高い？全共闘運動のはじまりで、翌春にはバリケードの中にいた。それから24年、気がつけば瀬戸内海汚染や琵琶湖・淀川汚染の研究に没頭していた。1970年、沿岸の18大学に呼びかけて、瀬戸内海全域を、総勢80名の学生と若手研究者で調査したのがきっかけとなった。しかし、当時の若手もいまは無残に古手となった。

このまえ、新入生に対する最初の講義でこ

ういった。『諸君、教養部では徹底して無駄を溜め込みたまえ』。まさかこんなきざな言葉でいうわけではないが、要は一生に一度使うか使わないほどの知的な無駄、あるいは体験を、いまだけでもええからやっときなはれ、ということである。たとえば、自転車に乗るときを考えてみる。いったい何センチの幅を使って走っているであろうか。かなり空気の減ったタイヤでもせいぜい3センチであろう。ではこれだけの幅の道があれば走れるか。不可能である。倍の幅があればどうか。無理である。せめて2メートルぐらいないと不安で走れない。つまり、差引き1メートル97センチのまったく使われなかった無駄があればこそ、われわれは心やすけく自転車に乗れる。人生の幅とはこういうたぐいのことを指すものであろうと思う。

ぼくの教養部時代もふくめて、学生にとっての教養部の1年半は、その後にはせまりくる、潤い少ない人生の時の流れの中での一瞬のオアシスではなかったか。

ふりかえれば、学生時代や助手時代は、やんちゃ坊主の、疾走する青春であつた。ぼくにとって、教養部はすごく気に入った風土であつた。



ベンヤミンと文化

水田 恭平 (独語)

20世紀前半の世界史的激動の震源地のひとつであるベルリンに生まれ、文字通りその激動を全身に受けたヴァルター・ベンヤミンという男がいる。彼の書いた批評文やエッセイをはじめて読んだのは今から20年以上も前のことになる。当時ベンヤミンは、1930年代のヨーロッパの危機と切り結んだ批評の書き手として、60年代の激動と重ね合わされて日本にも紹介されはじめていた。しかし、

私たち20才すぎの学生には、そういう著作集の帯の言葉が打ち出すような政治性とはほど遠い、もっと隠微で、エロティックで、ものに執着したベンヤミンが一種麻薬のように効いた。もうすでに些か疲れていた私たちには治癒として働いたのだ。そういう私たちがもっとも気に入っていたベンヤミンのテキストは、『1900年前後のベルリンの幼年時代』というものである。そこでベンヤミンは、ベルリンを遠く離れ地中海上の島で、自分の幼年時代を振り返っている。19世紀末、ベンヤミンの幼年時代とほぼ同じ時期にベルリンに留学していた鷗外は、『舞姫』にそのベルリン像を定着させている。普仏戦争勝利を記念して建てられた戦勝記念塔が、『舞姫』の主人公にはプロイセンミタリズムの象徴として捉えられているが、ベンヤミンの回想の中ではその同じ塔が世界史の墓場となり、墓碑銘となる。本来ならもっと感傷を伴って捉えられるかもしれない幼年期の記憶への遡行が、時代の切迫、もっとはっきり言えばファシズムの切迫によって死の様相に彩られているのだ。しかしもう一度繰り返すが、それを端なる政治的メッセージにしない、余りに私的なコンテキストがテキストに複雑な陰影を作っている。

さてベンヤミンのことにこのように言及してきたのには以下のような理由がある。彼は間違いなく20世紀のドイツ語圏が生んだ最大の文章家のひとりだが、すでに書いたようにその文章は微妙なエロティシズムに満ちている。現在ベンヤミンは、都市論の、写真論の、いやさらにポスト構造主義の先駆とすらみなされているが、私にはベンヤミンのテキストは決してそれら大きな意味によ



てではなくて、個的生と歴史と、そして何よりも非常に私的な触覚とが二度と反復しない偶然のなかで織り上げたテキストである。それに触わったり舐めたり、ひっくり返して眺めたり、とそのテキストに淫すること。テキストの学などと提唱したくはないけれど、こういう快樂なしに文化も何もないだろう、と依怙地に私は考える。教養なんてもういらぬ、文化、それも国際文化だよ、などとは言いたくない。ここに新たに誕生する学部が、時代の影の方でひそかに糸を紡いでいる人間との出会いの場になってくれれば、いうことはない。それ以外のところに文化なるものを想像することはむづかしい。この原稿、またも手書きで書いてしまった。

心と口と行ない

池田裕司(数学)

神戸大学の改革は行なわれました。組織的には教養部の廃止と、国際文化学部と発達科学部の二学部新設。そして大学教育センターの設置となります。教養部が責任部局となっていた業務は全てなくなりました。所属教官はほとんどがどこかの学部配置換えになり、全く対等にその学部の研究教育に携わることになっているはずであります。

一貫教育の導入は全学的な教育原理の変更です。即ち、どの学部も多かれ少なかれ改革されたわけですが、一貫教育は本質的に当該学部が責任を持つものであるが、単一学部では不十分な事と、総合性を加味する意味から、共通性を有する授業科目とそれを担当する教官集団が新たに編成された。これが全学共通授業科目と幾つかの教科集団である。だから、共通授業科目の実施は全学協力機構の一環として位置付けされるものであり、教科集団は全学の支援体制の下で運営されるものなのであります。ところが、この協力機構や支援体制はシステムとして明示されていない。例えば、ある学部学科はメンバーが教科集団に属して授業を担当すると云う形で貢献するならば、そうでない学

部学科はどのような形を採って貢献する事になっているのだろうか？これが未解決のまま放置されるようならば、新たな二重構造の導入となることは明らかであろう。

主に数学について書こう。お断りしておく。筆者は数学集団の一員ではあるが、代表もどきであった事はないのでウラの事情には通じていない。しかし、中らずといえども遠からずだろうと思う。

今回の需要調査で、数学の要望が非常に多い事実が改めて判明した。学部数、学科数、授業科目数、予想される内容、全てに於て。専門基礎の話です。しかし、喜んでばかりはいられません。ここで冷静に数学集団の許容能力を測らなければいけないのです。改めて幾つかの学部のそれらしき教官を集めて数学集団を作ったのであるが、実はあり合わせであって、需要を満たすべく調整された組織ではありません。だから、需要と供給のミスマッチは起って不思議はないのです。需要側の制限と供給側の工夫は必要不可欠です。ところが、この点に関しては非常に不十分なまま、カリキュラムが決定され、時間割が呈示されたのです。驚

くべき事に、内容の検討もなしにカリキュラムが作成されたと云う話も聴えています。ここで一介の研究者かつ教育者としての立場を採って数学集団の許容限度を見ると、それは需要に比して随分と小さなものです。強行すれば、神戸大学の数学の研究教育のレベル低下を招きかねないと心配します。

さる大口需要学部の有力者は「我々が欲しいのは数学の素養である」と仰言いました。



全学共通授業科目としての専門基礎、この暗号を真面目に解読すれば、多くの専門学部へ共通する基礎的内容を持つ授業科目となるべきであります。

もし、需要各学部がこのように考えるならば、数学集団も専門家として知恵を絞り、工夫を凝らして、能力の範囲内で、それに応えることが可能ではないかと思われます。

神戸大学の改革は遂に歩き始めました。教育面

での一貫教育プラス全学共通授業科目は大きな変更であり、成立迄には多くの政治的迂余曲折など仲々表に出ない事もあったようですが、そのような非学問的な問題はもう止めにして、この枠組の中で可能な限り良い教育を考えて行かねばならない時が来ていると思います。

古い時代の人々が新しい革袋を作ったつもりなのだから、その過程、経緯は知らないふりをして、我々は新しい酒を入れよう。

「消費される教養」

三上剛史(社会学)

私はまだ教養部に赴任して4年目なので、廃止される神戸大学教養部に対して特別の感慨は無いと言っても良からう。むしろ強く感ずるのは「大学」「学問」或いは「教養」といった一連の概念への拘りである。

嘗て、さる大学の文学部に所属していた際に、週一コマだけ一般教養の社会学を担当したが、私にとってこの授業は非常に楽しく、また勉強にもなる授業であった。その後、教養部にやって来て、最初の内は随分と充実した大学生活を——研究の面でも、授業の面でも——送らせてもらったが、

そろそろビギナーズ・ラックも失せる頃、教養部「お取り潰し」となった。

教養部「専属」教官となって、また、今回の大学改革を眺めていて思うことは、「教養」はもはや人間形成の為の某かの糧などではなく、「オモシロク」なければならない消費財になってしまったという事実である。いや、大学自体が消費される時代になったと言うべきである。そうならば、もう専門も教養もない。大学では、現実適応主義的な技術的知識と、人目を引きそうな「カルチャー」だけが生き残り、「高度な研究」と称される学問——

国家と企業の世界戦略にとって有効な知的技術とイデオロギー——は「大学院大学」とやらへ移されることになる。

これも世の中の流れと言えればそれまでだが、「バブル」が終焉して新しい世紀の基礎固めをせねばならぬという時に、日本人の「知」は本当にこんなもので良いのだろうか。できることなら、中世の有閑階級よろしく、山中の別所か修道院にでも遁世してしまいたいというのが偽らざる本音である。



「体育実技」から『健康・スポーツ科学』へ

平川和文（保健体育）

今回の改革による教養部廃止にともない、私は10月から新たに設立される発達科学部の人間行動・表現学科身体行動大講座に配置転換となります。また、全学共通科目（いわゆる現在の一般教育科目に相当）の健康・スポーツ科学実習も担当します。私の教養部在籍期間は昭和50年（1975年）4月からで、今年で17年ということになります。赴任当時（いやもっと前）から、教養部改革の動きは活発に議論されており、教室会議においてもA案とかB案とか、当時の改革構想について話し合われていたことを思い出します。その当時は、何のこともさっぱり分かりませんでした。そんな私が、今回の改革の最後の新学部設立推進委員として、教養部廃止を含む神戸大学全体の改革の動きをより近くで見、また考えることになったことを、今は大変感慨深く思っています。

私は今回の神戸大学の改革を、4年間一貫教育による専門教育の充実と、従来の一般教育の質的向上と考えています。いらぬゼイ肉をとり、スリムになって中身の濃い一般教育科目として充実させ、専門科目との相互関連から大学教育全体を向上させるものと思っています。専門関連科目の1年次からの導入は、確かに新入生にかなりのインパクトを与えているようです。カリキュラム改革を先取りした工学部学生の体育実技でのことですが、学生同士の会話の中で、「昨日3時まで英語の勉強してたので眠たいわ。今日、専門のゼミでの発表があたってねん」と、眠たそうな顔は例年の学生と変わらないのですが、眠たさの原因が今まで聞いたことのないような会話のためであり、やはり自分の専攻した専門の授業となると学生の態度や心構えも違うものだなと、カリキュラム改革の影響を実感しています。それと同時に、今ま

での教養部とはいったい学生にとってなんであったのか、と考えてしまいます。

教養部教官をしていて私が一番いやな感じがしたことは、学生の会話の中で一般教育科目のことを“パンキョウ”と言うことです。高校の延長だ、教養砂漠だといいながら、学生はどれだけ一般教育科目の内容を理解しているのだろうか、いつも腹立たしく思っていました。最近の学生はアルバイト・旅行・サークル活動・おしゃべり・それに勉強など、やるが多すぎるのでしょうか、教養部はレジャーランドのような観もあります。またそのような学生生活でも専門に進めたのです。社会に出る前の最後の自由な時間をいっぱい楽しむのも大切とは思いますが、深く学ぼうとする真摯な態度の留学生の大学生活ぶりを見聞かすと、日本の学生も気付かされる点があるのではないかと思います。

私が担当している体育実技も他の教科と同様、大学改革の大波に揉まれています。そして今回の一連の改革にともない、保健体育教室では従来の「体育実技」を『健康・スポーツ科学実習』に、また「体育理論」を『健康・スポーツ科学講義』に改めることにしました。一般にある名前を変えるというのは、何か従来のものに対する反省の結果か、またはその内容が現状に十分対応できなくなったためによるものかと思えます。今回の授業科目名の変更は後者のほうであり、より学生・社会・教官のニーズに即した内容を実現させるためです。私は、大学教育においても身体活動は必要だと考えます。それは、身体の発育・発達を考えれば、小・中・高校と継続してきた体育実技を、身体の完成期にある大学でその場をなくしてしまうことに対する危惧と、大学は、生涯にわたって豊かな

生活をエンジョイするためにも必要なスポーツや運動の実践能力を学ぶ最後の大切な場だと考えるからです。スポーツ・運動の必要性は、国民の健康・福祉問題のこれからの課題として今、各省庁が競って民間・企業・公共のための社会体育指導者の養成に乗り出しているという事実が、最もよく物語っているのではないのでしょうか。今回の大学設置基準の大綱化に伴い、体育実技を選択科目にする大学もあります。また大学体育に対する批判として、体育の必要性は理解できるが、なぜ必修にする必要があるのかという意見をよく耳にします。私はただ単に必修をはずして、体育が好きな学生が選択で履修すればよいという考え方には賛成できません。それでは身体活動を最も必要とする学生を、教育の対象から除外してしまう危険性があるからです。また運動部の学生は確かに人一倍運動をしているでしょうが、それは一つだけのスポーツについてであり、『健康・スポーツ科学』のめざす全てとは成りえないと考えます。私は、体力は貯金できると考えています。即ち、身体の完成期に十分鍛えておけば、生涯にわたって健康面にプラスに作用すると思っています。しかし、

最近では生活様式が全てより便利で楽な方向へと進んでいること、また20才前後という年代は体力的にもかなり無理がきく時ですので、健康・体力の必要性を実感しにくいのも事実でしょう。でも私の部屋を訪ねてくれる卒業生が、「先生、やっぱ体力やわ」と言うのもまた事実だと思います。

私は発達科学部身体行動大講座に移ってからは、現場の身体活動場面における、より安全で効果的な運動処方方を科学的に教育・研究したいと思えます。大学ではマイクロなことを扱っているほうがより研究のように見られがちですが、私はマクロな立場から、ヒトの健康・体力問題を現場との接点を中心に研究を続けたいと思っています。

最後に、2年間教養部の新学部設立推進委員として携わって感じたことですが、物事がひとつの方向をもって動き出す時のエネルギーというもの、巨大ですさまじいものだということです。そのような大波には、個々の力ではそう簡単に太刀打ち出来ないと感じました。この教養部廃止を含む神戸大学の改革がより良い方向に進むためにも、大学構成員全員の努力が必要と思えます。



“教養部の思い出”

成 相 裕 之 (化学)

大学改革の嵐の中で、発展的解消といえれば聞こえがよいが、解体・消滅してゆく“教養部”にまつわる思い出を綴ることにした。

広い専門領域の教官集団である教養部は、私にとってまさに知識の宝庫であるはずであったが、発掘半ばにして方々からの侵略者（外圧）によって、四方に分解されようとしている。あたかも、アフリカ大陸が一部のヨーロッパ先進国によって植民地化されていったようにである。しかし、幸いな事は表札こそ変われども、個人個人が現在どおりに独立して自治権を有することができるということであろう（近い将来には各学部統合されるであろう）。

私の卒業した大学は、教養課程と専門課程とが区分されていなかった。他大学に行っていた高校の級友が1単位で3年生になれず留年した話等を聞くたびに、大変だなーと同情もしたし、また、自分の大学には教養部がなくてよかったと陰でよくそ笑んだものであった。だから、4年で語学を受けていた友人もいたし、「就職が決まっていますのでどうぞ宜しく」と語学の教官の所へ直談判に行く人もめずらしくはなかった。また、1年次から専門基礎科目が、無機・有機化学とあり、教官や先輩とのつながりもかなり密にあり、2回生になるときは学科のほとんどの人を知っていた。だから、4年一貫教育といっても全く違和感はない。ただ、大学設置基準の大綱化が大きな変化をもたらせば別なのだが。

本学に着任して10余年、外観的には、E棟やF棟が新しく建ったくらいで大きな環境の変化はないが、内部は確実に老朽化し、私の年齢もやはり10余年増えてきているのである。健康の為に続けている野球も練習に出る日数



が減り、同時に打球も飛距離がぐーんと落ちてきた。老化の一步であろうか、嘆かわしい。テクニックと昔の顔でプレーしている現状である。他の部局も若い野球人口が減り、昔からのメンバーがやはり活躍しているのをみると、まだまだ引退できないのだなーと我が身を納得させているのだが、気力の衰えはないまでも、やはり打球の勢いを見るかぎり老化は明白になっているようだ。さらに、学生気質も共通一次試験を期に画一的な個性の乏しい（実は考えを表面に出さない）学生が多くなってしまった。思ったことは発言し、また行動し、教官に対しても自己の意見・考えを主張するような学生にはほとんどお目にかかれなくなった事は淋しい限りである。一通過点として教養部をとらえていた学生が多かった事も事実であろうが、やはり自由に自分の考えを主張し、討論出来る場所・機会があってこそ真の大学の姿であろう。

最後に、培われた多くの顔と顔のつながりを横軸に全学的な顔のつながりが出来、より広い高度な専門領域でのつながりも育っていけば、発展的解消であったと胸を張って言える日もそう遠くはないだろう。

13-30-7000

栞 田 義 一 (独語)

13-30-7000。これは、テレメッセージの信号ではありません。

神戸大学教養部に赴任してきて今年で13年になりました。3月下旬なのにまだ残雪の北海道小樽からフェリーに乗り舞鶴に着いて、まず車のスパイクタイヤを夏タイヤ（北海道ではこう呼んでいました）に履きかえたのを、まだ鮮明に覚えています。単科大学出身で、前任校がやはり単科大学であったので、鶴甲・六甲地区に広がるキャンパス、教養部の学生の多さに着任当初は戸惑いを感じました。

30、この数字はこの13年間に神戸大学でのドイツ語の授業を共に担当した同僚の数です。教養部ドイツ語教室はドイツ人を入れて18人（以前は19人）の大所帯です。この13年間に12人の方々が退官・配置換えなどで神戸大学を去られ、新しい同僚を迎えました。出身地・出身校・専門分野が多彩で学識・個性が豊かな同僚の方々からは、年一回ドイツ語教室が発行している「ドイツ文学論集」、月一回の教室研究会、更には日々の談笑を通じて、ドイツ語の教授法について、ドイツ・ドイツ語の様々な点に関して知識を得ることができました。「個性を発揮してのびのびと教育・研究をする」だけではなく「大いに遊ぶ」、これがドイツ語教室の「伝統」でした。年一回の旅行、ソフトボール・テニスなどのスポーツ、六甲・三宮界限で酒を酌み交わしながらの談論、これらを通じての「人の和」は教育・研究に大いに反映されてきました。ドイツ語教室をはじめ教養部のいろいろな分野の多くの同僚との交流はまさに教養部のメリットであり、十二分にその恩恵を享受させていただき、感謝しております。

7000=13×11×50。この13年間に平均50名のクラスで前・後期合わせて年平均11コマのドイツ語授業を担当してきました。この計算によると、こ

れまでに7000名以上の多くの学生諸君と授業で接してきたこととなります。文系・理系9学部の様々な専門を志す、様々な資質を持つ学生に授業をすることは、画一的にはできず多様な工夫を求められるものでしたが、それと同時に多様多彩な学生諸君に接することこそユニバーシティの良さであり、学期はじめにはどのようなクラスを担当するかが楽しみでもありました。

このように教養部での13年間で多くの優れた先輩同僚に恵まれ、優秀な学生と共に学ぶことができたことは大きな幸せでした。新学部発足後は、国際文化学部コミュニケーション学科言語論大講座に属し、比較言語学・言語構造論を担当します。この言語論大講座は、人間がお互いにコミュニケーションをはかる際に用いる、もっとも基本的で重要な手段としての、「ことば」に関する様々な問題を取り扱う講座です。この大講座では、言語学・英語学・ドイツ語学・中国語学・日本語学・西洋古典語学を専門とする11名の「ことば」のエキスパートによって、「ことば」の問題が教育研究されます。新学部の発足後も、これまで教養部で培われてきた「風通しの良さ、暖かい雰囲気」という伝統を新学部へも引き継ぎ、人との出会いを大切にしていきたいと思っています。



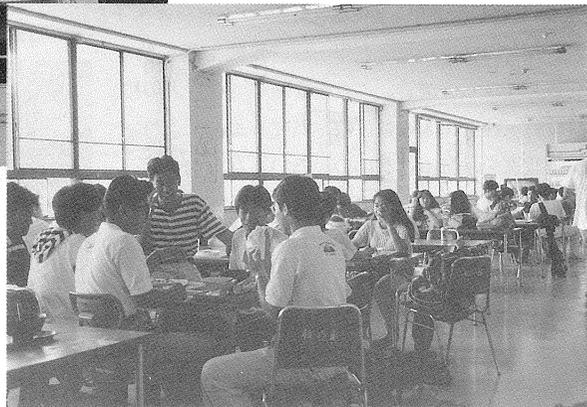
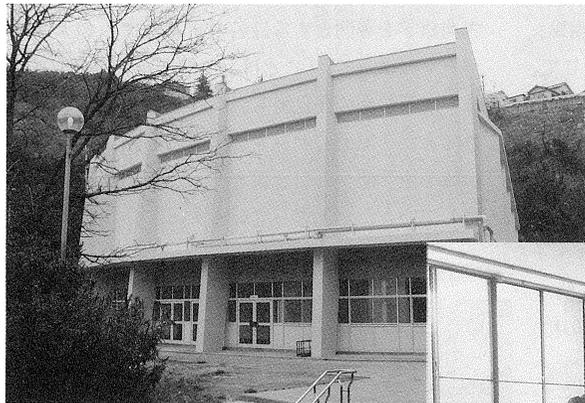
キョウヨブカツワ

渡 邊 清 (数学)

そうか、この女子学生もそう思っているのか。「教養部勝つわ」、バスの中で2人の学生の会話を小耳にはさんで、私もつくづく思った。学部よりも教養部が勝つ。学生にとっては、厳しく長い砂漠の旅のオアシス、様々な友あり、遊びあり。教師にとっては、圧迫感の少ない自由な空間。思い返してもこの10数年、色々なことをやった。「リーマン予想」という未解決の大問題の勉強、物理学再入門、「日本の歴史」、「世界の歴史」という長いシリーズとの付き合い、九州王朝への憧れ、K先生との果てしない将棋名人位争奪戦、憂いぶる鈍テニス戦、……。文科系や体育の先生達とも知り合いになれた。学生もたくさん教えたはずなのに、思い出すのはチラホラ、気楽だ。でも、なんか変か。数ヶ月前、高校時代の先生と20年振りに

会って話しをする。恩師、懐かしい。教養部がなくなるという。学生は、困らないか、楽園はなくなるか。ある先生曰く、大丈夫、大学全体が教養部になる。まことに至言である。安心。教師にとっては、労働環境が少し変わるだけだし、仕事なのだからと思う以外に仕方ない。悪いことばかりではなく、良いことも少しはあるだろうし、それでも、大学環境汚染問題は考えてゆきたい、未来の大学の為に、……。ふと我れに返る。もうすぐ教養部前のバス停に着く。くだんの女子学生たちはまだ話している。テニスのラケットは持ってきたか。そして、また同じ事を言う。

「今日よ部活わ！」



外国人労働者問題

講師 鍛冶邦雄(関西大学助教授)
日時 1992年2月19日

講演に先立ち、宇磨谷委員長から今回の演題の趣旨説明と講師の紹介がなされた。教官は25名の出席。資料として、ここ3ヶ月程の①米国、香港など諸外国における外国人労働者に関する新聞記事切り抜き、②日本における同新聞記事切り抜き、及び③不法就労事件の推移などの統計資料、を集めたB4用紙3枚のコピーが配布された。以下、その要旨を報告する。

【要旨】

資料②の新聞記事から伺われるように、日本では外国人労働者問題というと、研修制度と外国人の違法行為に関わる話題が目立つ。これは日本政府の対応を反映したものに他ならない。

外国人労働者について問題になるのは、一般労働者の受け入れ問題である。日本政府は外国人労働者は研修に絞って受け入れ、一般労働者は締め出そうとしている。不法就労の一般労働者は、低条件で働いていることも少なくない。ところで新潟県の中小工場で見られた中国人労働者の例など、優秀な人材を技術研修の名目で受け入れながら、単純労働に従事させ、全く技術研修になっていないこともあった。

日本の入国管理制度は、特殊である。それは入国許可と労働許可(在留資格)が同時に与えられる点である。つまり入国の際に、日本での活動内容が規制されるのである。日本の入国管理制度の根幹は、日本に労働力が余っていた昭和26年に作られたものを引き継いでいる。最近では特殊な技術、技能、資格を持つ外国人には積極的に門戸を開く法改正を行ったが、単純労働者は認めず、基本的に外国人の労働を規制する政策を取っている。

現在の外国人労働者の増加の背後には、日本の労働事情の変化の問題がある。1986年以降の好況により、産業構造が変化し、企業の多角化が進んだ。一般的な人手不足に加えて、職種と地域によって、特殊な厳しい人手不足に悩むところが出てきた。良質な日本の労働力は優良企業に流れ、労働生産性の低い、下部企業が深刻な人手不足に陥った。このような所が、一般労働のための外国人労働者を求めている。

ただし、このような所に、安直に労働者を受け入れてよいかという問題もある。ドイツでは、北部の重厚長大企業がトルコ人労働者等を受け入れた。オイルショック以後、受け入れを止めたが、それでも現在、400万人が残っている。一方南部のハイテク企業は外国人の受け入れは少なく、それを女性の進出で補った。その結果、北部は失業率も高く、設備更新が遅れ、生産性も下がってしまった。

近年、米国とECは、外国人単純労働者の受け入れを認める方針に転換した。米国は低賃金労働者を受け入れて、産業競争力を付けるため、ECは特許などの先進国の利益を認めさせる見返りとしてである。日本は世界の流れの中で、米国、ECに裏切られ、取り残された。

また、これまで中東産油国は、大開発の結果、人手不足となり、周辺非産油国とパキスタン、フィリピン等東南アジア諸国から外国人労働者を受け入れていた。ところが近年、これら産油国の財政がひっ迫し、外国人労働者の受け入れが難しくなった。そこで日本、台湾、韓国に受け入れが求められている。

そこで国際協力の観点から、労働者の受け入れ問題が議論されている。しかし、発展途上国が送り出したい労働力と、日本が受け入れを認めた労働力には、すれ違いがある。例えばタイでは知的労働者はむしろ不足しており、一方で一般労働者は余っている。送り出したのは後者である。即ち、日本が研修制度という枠で正式に受け入れを認める労働者は、現地でも大いに職はあるのである。日本が行おうとしているのは、内外の圧力をかわすためのごまかしの政策に過ぎない。そしてその裏では、一般労働者が様々な抜け道を通じて受け入れられている。例えば、南米の日系人とその縁者の就労を認めたり、私費留学生の身分の外国人の就労を認めている。

ここで日本が正式に受け入れを認めていない、いわゆる不法就労者の増加が問題となっている。平成2年度では2万9000人が数えられている。しかし、実質は推定16万人と言われ、男子はバングラデシュ、パキスタン、タイから、女子はフィリピンからが多い。更に最近ではイラン人の増加が目立つなど、拡大の傾向にある。たとえ60万人の受け入れ枠があっても足りないであろう。彼等の権利を守ろうにも、精々賃金のチェック位であろう。米国でも同様な問題がある。

結局、外国人労働者の問題は、全面拒否しても、また認めても、或は条件付きでも、全て問題が残るのである。日本国民の負担の増大は避けることができない。要は、国民がいずれの選択をするかの覚悟の問題である。このことを考えないマスコミの論調は、無責任と言わざるを得ない。

日本政府は基本的には受け入れを規制しているが、外務省、通産省、法務省、労働省でそれぞれ意見は全く異なる。受け入れた外国人の待遇について、ドイツは年限制を設けたが失敗した。スウェーデンは基本的には受け入れを認めないが、一部ユーゴやギリシアなど、特定国の特定の年代の者に限って受け入れている。その場合、待遇は本国人と全く同等である。日本のとるべき道は、受益者と負担の関係を明確にした上で、国民の選択に任ずることであろう。

講師 鈴木一州(神戸大学教授)
日時 1992年7月1日

『人権』14年をふりかえって

講演の概略

以下では、(1)総合科目「人権」の実施状況の概略、(2)学生の動向、(3)私個人の「人権」への関わりについて述べる。

(1) 総合科目「人権」の実施状況の概略

'74、'76年に二課程「解放研」から「狭山裁判」に対する抗議声明を出してほしいという要望が出る。'78年に「落書き事件」。学生達のハンストなどを経過後、形式的には小島・元教養部長からの発案という形で、総合科目「人権」、教職員研修会などが発足する。'78年に「同和問題検討委員会」が発足。'79年から総合科目「人権」（以下『人権』と略記）が発足。当初の同和問題検討委員会では基本的な合意として次のことがあった。即ち、①研修や講演などの「人権」問題への対応の中で、学生との持続的な関わりをもつという理由で総合科目を特に重要視する、②『人権』の担当者は教養部教官を原則とする。その後、「解放研」等の熱心な中心的聞き手から、1)より論点をしぼった講義、2)実践体験のある講師による講義、という要望が出る。その要望を受けて、同和問題検討委員会の検討を経た後、'80年から玉本格、金時鐘という教養部教官以外の講師による『人権』が開始される。当該形式による2年間の講義の後、より専門的な講義に対する学生の要望等を受けて、'82年から講師の変更がなされる。さらに、全体的な展望の提供という学生の要望を受けて、'84年から講義初回日に担当講師全員による各々の講義概要の説明を行う。全体的展望を別個独立して行うようにとの要望を受けて、'86年から鈴木一州がそれを担当するようになる。'86年後期から「女性解放論」が加わる。'89年から受講生が激減。担当講師からの受け持ち時間数の増加要望を受けて、'91年から各講師の時間数が倍増される。そして現在に至る。同和問題検討委員会は、『人権』の実際の実施状況に関与しないで企画立案するため、『人権』の現場を知る必要から、鈴木が『人権』に常時参加するようになる。

「特講」関係について述べると、'84年に、『人権』を3限に開講し、4限を討論に当ててほしいという学生の要求がなされるが、実現困難であるために、「特講」で人権を論じることになり、担当者は鈴木となる。学生の難点として、1)極端な信条主義、2)分担請負主義という特色が顕著であったため、全体的視点と系統的視点の獲得を「特講」では目指す。14年経過した現在、『人権』でも「特講」でもそれなりの実りが出始めた感じである。さらに、'80年から飛田雄一による社会科学特講「朝鮮史」が現在まで継続して行われている。

(2) 学生の動向

ハンスト等で大騒ぎをした学生達は、「解放研」の第二世代であり、私は第一世代についてはほとんど知らない。'82年頃には第二世代は卒業または退学していき、残ったのが第三世代で、'86年頃から学生委員を悩ましたのは第四世代である。「解放研」のメンバーは公式には不明である。というのは、'79年に「解放研」は学生部から大学の公認団体の承認を受けたが、その際、就職差別等の理由で、責任者と顧問名のみ登録で、解放研のメンバーの名は届けられなかった。'87年に「解放研」のメンバーが成田で逮捕されたのを契機に、神戸大学教養部当局と「解放研」との癒着に対する非難が出る。その後、神戸大で「民青」の運動が約1年間にわたって盛り上がる。それに対して「解放派」という外人部隊が「解放研」支援の名目で神戸大に介入し、混乱を加速化させる。'88年夏頃に「民青」の活動が沈静化すると同時に、「革マル派」の活動が活発化し、その活動家らしき学生が学生寮で襲われ重傷を負うという事件が発生する。'89年には「革マル派」によって「解放派」が襲撃される。'91年以降、両派は神戸大に姿を見せなくなる。

(3) 私個人の「人権」への関わり

'76年の「狭山裁判」に対する抗議声明要求に際して、二課程委員長をしていた馴れ初めから「人権」問題との関わりは始まり、'78年の教授会と学生との話し合い（「糾弾会」）で学生から批判を受ける。田口寛治・元神戸大教授と共に「解放研」の顧問を井澤・元教養部長から引き継ぎ、現在までその顧問を勤める。「解放研」のメンバーとの接触は、情宣ビラの配布とカンパ要求などのみで、年に1、2回程度である。「解放研」の第三世代が「特講」に出席するようになってから、関係は密になるが、井澤・元教養部長との関係はほどにはならず。顧問を引き受けるにあたっては、「解放研」と大学とのパイプ役をしないと両者に宣言する。

最後に、活動家が大学から去った後に、ようやく本年度あたりから、『人権』の受講生の中で、いままでも同和教育を受けたことがない学生の間で動きが出てくるようになった。彼らは、サークル形成などではなく、単に問題の所在を知りたいという願望の下で出席するようになる。この望ましい傾向を通して、私は、時代の変化を痛感する。他方、貧困と無縁な部落内外の学生に対して同和問題を理解させることが困難になりつつあるという点でも、時代の変化を感じる。また、外国での差別が他人事ではないという感覚が育ちつつある。さらに、男子学生の中で、女性差別を真剣に考える学生が着実に増えつつある。

自治会との交渉記録

- 1月8日 自治会執行委員長から委員長の選出報告受理（注1）
- 1月8日 自治会執行委員長から自治会執行委員役職決定の報告書受理（注2）
- 1月17日 自治会執行委員長、新入生歓迎実行委員長連名の要求書受理（注3）
- 1月29日 1月17日付け要求書に対する回答（注4）
- 1月29日 1月17日付け要求書に対する交渉
- 2月5日 新入生歓迎実行委員長から企画書受理（注5）
- 2月29日 自治会執行委員長から要求書受理（注6）
- 2月29日 新入生歓迎実行委員長から要求書受理（注7）
- 3月9日 2月29日付け要求書に対する回答（注8）
- 3月10日 2月29日付け要求書に対する交渉
- 4月30日 自治会執行委員長、六月祭実行委員長連名の要求書受理（注9）
- 5月12日 4月30日付け要求書に対する回答（注10）
- 5月13日 4月30日付け要求書に対する交渉
- 6月1日 六月祭実行委員長から要求書受理（注11）

(注1)

教養部長殿
1992年1月8日
神戸大学教養部学生自治会執行委員会 委員長 []
昨年12月12日、第3期神戸大学教養部学生自治会執行委員会が成立し、上記の通り、委員長 [] ([]) に決定しました。今後の貴部の御理解と御協力をお願いします。
なお委員長等、各役職は1月6日に決定致しましたことご報告します。
以上

(注2)

教養部長殿
1992年1月8日
教養部学生自治会執行委員会 執行委員長 []
去る1月6日、第三期神戸大学教養部学生自治会執行委員会の各役職が、下記の通り決定致しました。今後の貴部の御理解と御協力をお願い致します。

委員長	[]	([])
副委員長	[]	([])
会計	[]	([])

以上

(注3)

要求書
教養部長殿
1992年1月17日
教養部自治会執行委員会 委員長 []
教養部自治会新入生歓迎実行委員会 委員長 []
1992年度入学者に対する新入生歓迎行事等、実行に際して下記のような問題について、交渉を行うことを要求します。
記

1. 3～4月の日程について
2. 前期カリキュラムと休講措置について
3. 電話回線臨時設置について
4. 当実行委員会の新歓実行に対しての便宜確認
新歓期、第1・第2集会所使用
4月行事期、教室使用 日程便宜
パンフ配布便宜
物品援助 1、封筒2600枚
2、上質模造紙4枚入り10本
3、水性マーカー20本
4、ワープロ用インクリボン20本
5、上質紙20冊
5. 入学式あいさつについて

以上

(注4)

平成4年1月29日
教養部学生自治会執行委員会 委員長 [] 殿
教養部長 後藤博彌

回答書

貴要求書（1月17日付）の交渉につきましては、下記のとおり行う用意があります。
記

1. 日時 1月29日（水）16:30～18:00
2. 場所 A棟1階小会議室
3. 学生側 教養部学生自治会執行委員会委員
新入生歓迎実行委員会委員
4. 大学側 教養部教授会学生委員

(注5)

企画書
1992年2月5日
教養部自治会新入生歓迎実行委員会 委員長 []

記

以下のとおり新入生歓迎行事を実施します。つきましては、休講措置を新入生歓迎オリエンテーションを4月16日(木)、17日(金)の午後2コマ、計4コマについて行うとともに、18日(土)午後の講義について便宜をはかっていただくようお願い致します。

- A: 日程 新歓ピクニック 4/5
- クラスオリエンテーション 4/16,17,18
- 茶話会 4/17
- サークルオリエンテーション 4/15,16,17,18
- 座談会 2/10をはじめ、4月より月1回の予定

B: 場所 神戸大学教養部構内を中心に行う予定

C: 企画概要

☆; 新歓ピクニック

趣旨: 入学式を前にして、一足先に新入生に参加してもらい、自治委員会、新入生歓迎実行委員会を中心に、参加を呼び掛けた学内諸団体と共に歩き語る過程で、新入生を神戸大学の一員として歓迎する。またこの機会に新入生が学部学年を越えて良き知人を作る場を提供する。

日時: 4月5日
場所: 未定
参加人数: 新入生120人、主催側50人
予算: 10万円

☆; クラスオリエンテーション

趣旨: 入学まもない新入生を自治会として歓迎し、クラスオリエンテーションを通して、「大学とは何か」「学生自治とは何か」を考えてもらうとともに、新入生に自治会員としての自覚を促す。

日時: 4月16日(木)、17日(金)、18(土)
参加人数: 新入生全員
場所: B棟中講義室

☆; 茶話会

趣旨: 入学して間もない新入生と我々が在学生が語り合い、交流することによって、相互理解を深められるような出会いの場とする。

日時: 4月24日(金)
参加人数: 150人(予定)
場所: 生協食堂南側(予定)
予算: 15万円

☆; サークルオリエンテーション

日時: 4月15日(水)、16(木)、17(金)、18(土)(15日(水)は昼休みのみ)

☆; 座談会

趣旨: 新入生と一緒に様々なことを学んだり考えたり出来る場所を作る。
日時: 2月10日(月)
参加人数: 50人程度
場所: L201

(注6)

要求書

教養部長殿

1992年2月29日
教養部自治会執行委員会
委員長

学内施設、改革に関して、下記のような問題について、交渉を行うことを要求します。

記

- 印刷室の窓、ドア、及び印刷機について
 - ロッカーの増設について
 - 改革について
 - ・進行状況の公開、特に学生の勉強条件に関する事、一般教育の充実に関する事、また旧教養部施設、一般教育に関する学生要求の交渉相手について
- 学生委員長が部長に相談する。

以上

(注7)

要求書

教養部長殿

1992年2月29日
神戸大学教養部自治会新歓実行委員会
委員長

1992年度、新歓活動実施に際して、次のような要求を行います。

- 1、新歓企画に関して
- 2、前期カリキュラムについて
- 3、サーリオ開催のための援助
- 4、B棟前の使用及び、ステージ設置、拡声器の使用
- 5、B棟階段横への長椅子等の収容
- 6、教養部食堂前広場の使用及び、楽器などの使用
- 7、A等1階ロビー(A104及びL102の使用)
- 8、B,L,M棟の使用

以上

(注8)

平成4年3月9日

教養部学生自治会執行委員会
委員長

教養部長 後藤博彌

回答書

貴要求書(2月29日付け)の交渉につきましては、下記のとおり行う用意があります。

記

1. 日時 3月10日(火)10:00~12:00
2. 場所 A棟1階小会議室
3. 学生側 教養部学生自治会執行委員会委員
新入生歓迎実行委員会
4. 大学側 教養部教授会学生委員

(注9)

要望書

教養部長殿

1992年4月30日
神戸大学教養部(I)学生自治会執行委員会
委員長
六月祭実行委員会
委員長

教養部学生自治会では、今年6月20日(土)、21日(日)に六月祭を行う予定です。その件に関して、下記のとおり、貴部との交渉を希望しますので、日時を決めていただきたいと思ひます。出来るだけ早い時期をお願いいたします。

記

1. 教室使用について
本年は六月祭を6月20日(土)・21日(日)の両日に予定しておりますので、その間教養部グラウンド及びA棟1階・B棟・C棟C201.C301.C401.C501・L棟(1F)・M棟・F棟の借用を申し入れます。(LL教室等を除く)また、使用にあたりましては、教室備品等に破損・紛失のないよう六月祭実行委員会で管理いたします。グラウンド・B棟間の通路、B棟・A棟間の通路、B棟前駐車場につきましても使用いたしたく申し入れます。
2. 休講措置(自主休講)について
六月祭実行委員会の方から、19日(金)の3・4時限及び20日(土)の授業を担当されている教官に自主休講にしてくださいようお願いいたします。
3. 車両入構について
六月祭に関する物品運搬の為、6月19~21日の期間、必要となる車両について入構許可をお願いします。入構団体・車種・ナンバーは後ほどお知らせいたします。なお、入構に際して実行委員が車両の確認をいたします。
4. 保健所関係書類への署名のお願い
模擬店の実施にあたって、保健所の許可が必要とされていますが、許可申請に際し、衛生上の問題等のため教養部長の責任のもとで行わなければならないので、届出書にご署名くださるようお願いいたします。(届出書はのちほど提出いたします)
なお、実際の衛生指導・諸注意等の模擬店の監督は実行委員会の方で責任をもってあたります。
5. 宿泊許可について
物品の管理に関連して、参加団体及び実行委員が6月19日(金)夜・20日(土)夜に構内に宿泊したいと考えておりますので、ご許可下さいますようお願いいたします。
6. 物品援助・育友会の予算援助について
六月祭各企画を運営するに十分な歳入を委員会では確保しておりませんので、六月祭運営に必要な物品・予算に関して援助をしていただきますようお願いいたします。なお、援助物品に関しては情報宣伝関係と衛生関係の物をお願いしたいと考えておりますが、具体的な品目については後日提出いたします。
7. 諸物品借用について
六月祭の準備・運営に関して必要な物品の借用をお願いします。具体的な品名・借用期間に関しましては後日提出いたします。
8. 第1、第2集会室の使用および第2集会室の電話回線について
現在、新入生歓迎のために第1、第2集会室を使用しておりますが、引き続き6月末日まで、六月祭運営のために使

用させていただきますようお願いいたします。なお、正式な手続きは随時いたします。また、第2集会室の電話回線についても、引き続き使用できるようお願いします。

9. その他
(注10)

平成4年5月12日

教養部学生自治会執行委員会
委員長 〇〇〇〇殿

教養部長 後藤博彌

回 答 書

貴要求書(4月30日付け)の交渉につきましては、下記のとおり行いう用意があります。
記

1. 日 時 5月13日(水) 13:30~
2. 場 所 A棟1階小会議室
3. 学生側 教養部学生自治会執行委員会委員
六月祭実行委員会
4. 大学側 教養部教授会学生委員

(注11)

1992年6月1日
六月祭実行委員会
委員長 〇〇〇〇

六月祭援助物品要求書

六月祭の運営に当たり、下記の物品援助を希望します。

記

希望物品

- | | |
|--------------------------------------|--------|
| 1 マジック(Uni POSCA 8:赤,黄,緑,青,黒×5) | 25本 |
| 2 ペンキ(水性)500青,赤,白,黄,黒×2) | 10缶 |
| 3 ポスターカラー(600:白,青,赤,黄,黒×2) | 10個 |
| 4 はけ | 10個 |
| 5 中質紙B4 | 30000枚 |
| 6 リソグラフ用マスター(理想科学工業、270×465200枚入) | 2個 |
| 7 リソグラフィックD(理想科学工業、印刷用、黒、エマルジョン、400) | 10本 |
| 8 ゴム手袋 | 30枚 |
| 9 角材(40×40×400) | 5本 |
| 10 角材(50×50×400) | 5本 |
| 11 ベニア板(90×180×5) | 20枚 |
| 12 ゴミ用ビニール袋 | 1000枚 |
| 13 オスパン希釈液(殺菌消毒用) | 20本 |
| 14 せんたくのり | 10個 |
| 15 ビニールシート1m×20m透明 | 1枚 |
| 16 雨ガッパ(簡易) | 30枚 |
| 17 ガムテープ | 10個 |

調整は、下から行って下さい。

1~7はどうか早急をお願いします。

以 上

平成4年3月23日
神戸大学教養部

一般教育の改革に関するお知らせ

神戸大学では、一般教育の改革を行い、平成6年3月31日を以て教養部を廃止します。

これに伴い、教養部制度に基づく従来のカリキュラムに代わって、新しいカリキュラムによる授業が導入されます。

ただし、平成4年度入学者及びこれ以前の入学者に対しては、従来どおりの授業科目が平成5年度まで開講されます。

平成6年度からは、授業科目、単位数、年次配当、授業場所、時間割等が大幅に変更されます。

以上のことを理解した上で、下記の点に留意して、平成6年3月31日までに卒業に必要な一般教育過程の単位を習得するように努め、充実した学生生活を送ってください。

記

1. 平成4年度は、従来どおりの授業科目が開講されます。
2. 平成5年度は、1年生用に新授業科目、2年生用に現行の授業科目が開講されます。
3. 平成6年度には、教養部が廃止されるので、学生は全員、学部所属することになります。
4. 平成6年度からは、全学生が新授業科目を受講することになります。
平成4年度入学者及びこれ以前の入学者で、卒業に必要な一般教育過程の単位を満たしていない者に対しては、新授業科目を現行の授業科目に読み替える等の措置を検討しているところです。
正式な決定がされ次第、掲示等で通知するので、十分注意してください。

5. 平成4年度入学者及びこれ以前の入学者は、授業科目の変更以前に、すなわち、
 - ① 昼間過程においては、平成5年度の前期(ただし、医学部は後期)終了までに
 - ② 第二過程においては、平成5年度後期終了までに卒業に必要な一般教育過程の単位を習得するよう努めてください。
6. 学生生活関係事務に関しても、大きな変更が予想されます。その際には、掲示等で通知するので、十分に注意してください。

第二課程関係の話合いの記録

- 2月27日 新入生歓迎行事に関する要求書受理
3月2日 上記要求書に関して新入生歓迎実行委員会等と話し合い

神戸大学教養部長殿

神戸大学第二課程新入生歓迎実行委員会
実行委員長 〇〇〇〇
神戸大学第二課程 サークル連合
委員長 〇〇〇〇

要 求 書

我々、新入生歓迎実行委員会は、新入生と在校生との交流、そして新入生に一日も早く神戸大学に馴染んでいただくことを目的とした新入生歓迎行事の一環として、合同コンパ、スポーツ大会を企画しております。

これらの行事に対し、委員会は下記の休講措置、予算、現物支給を要求致します。

なお、交渉日は3月2日(月)19:00~を希望します。

記

- 1 日程について
4月13日(月) 合同コンパ
4月16日(木) スポーツ大会第1日目
4月17日(金) スポーツ大会第2日目
- 2 休講について
4月13日(月) 2限目
4月16日(木) "
4月17日(金) "
上記の休講措置をお願い致します。
- 3 予算について
合同コンパ費用 300,000円
パンフレット「野草」作製費 30,000円
スポーツ大会費用 40,000円
諸 雑 費 50,000円
計 420,000円
- 4 予算援助について
上記(予算について)のうちから教養部に対し、290,000円の援助をお願い致します。
合同コンパ費用(訓育指導費から) 210,000円 パンフレット「野草」作製費 30,000円 新入生歓迎行事援助(育友会費から) 50,000円 計 290,000円
- 5 現物支給について(省略)

平成4年2月28日

神戸大学第二課程新入生歓迎実行委員会
委員長 〇〇〇〇 殿
神戸大学第二課程サークル連合
委員長 〇〇〇〇 殿

教養部長 後藤博彌

回 答 書

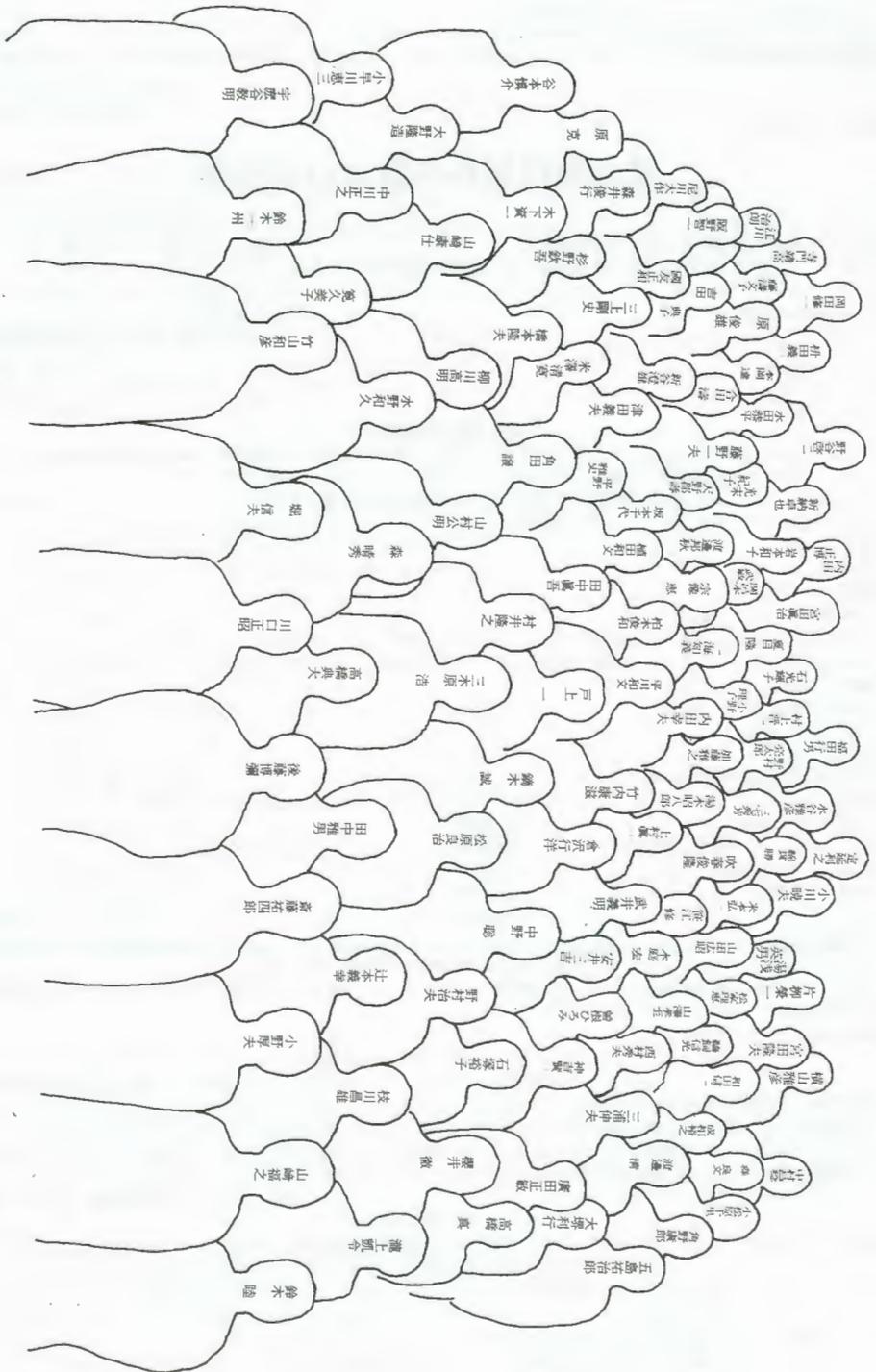
要求書(3月2日付け)の話し合いについては、下記のとおり回答します。

記

日 時 3月2日(月)19:00~
場 所 A棟小会議室
出席者 第二課程委員
第二課程新入生歓迎実行委員
第二課程サークル連合委員



神戸大学教養部教授会 (H. 4. 3. 11)





編集後記

教養部教官はこの10月から国際文化学部その他の学部に所属することになる。もちろん、あと1年半は教養部は移行措置のために存続するので、併任という形でとどまるのではあるが、「改革」について、これまで79、80号で取り上げたが、今号では、消えゆく教養部を惜しむ文章を特集することにした。さまざまな思いを書きのこして下さった先生方にお礼申しあげる。

それにしても、寄稿された先生方のな

んとすくないことか。とくに文科系の先生方からは、期待していたほどに原稿をいただけなかったのは残念である。私自身文系であるので、編集にたずさわる者としては失格であることを示しているのではないか。教養部の解体、新学部の設立などで多忙をきわめていることは先刻承知だが、どこか白々とした冷たい空気があったのかもしれない。(T.H.)

神戸大学教養部広報 No.81

平成4年(1992) 10月15日発行

発行 神戸大学教養部
〒657 神戸市灘区鶴甲1

編集 神戸大学教養部広報委員会
委員：橋本 隆夫 国友 正和
河辺 章子 宮田 眞治

印刷所 有限会社 わかばやし印刷
TEL 078-521-9166